

特集 RILAS 研究部門「知の蓄積と活用に向けた方法論的研究」部門共催

台日共同フォーラム 2024 「東アジアにおける炭鉱文化ルートとその社会的意義」

「石炭産業から何を学ぶか —学術研究の可能性と産業遺産の社会的意義を考える」

Introduction: Taiwan-Japan Joint Forum

‘What can we learn from the coal industry – The potential for academic research and the social significance of industrial heritage’

嶋 崎 尚 子 ・ 王 新 衡

本特集は、2024 年 1 月に台湾新北市で開催された台日共同フォーラム「東アジアにおける炭鉱文化ルートとその社会的意義」の第 2 部「石炭産業から何を学ぶか—学術研究の可能性と産業遺産の社会的意義を考える」での報告にもとづく論考、具体的には 13 報告中の 6 報告とコーディネーターによる寄稿の 7 論考からなっている。

本フォーラムは、以下のねらいで企画された。「世界共通言語」とされる石炭産業は、国・地域を越えた普遍的特性を有する。一方で、国・地域に固有の社会的文脈、文化規範を反映して独自の経過を辿ってきた。近年、台湾・日本・韓国とも、国内産炭地では、石炭産業に関する産業遺産（遺構、文書資料、生活史記録など）の保存、経験や記憶の蓄積が進んでいる。同時に、石炭産業に対する学術的関心が高まり、実際にこれらの産業遺産を活用した実証研究が展開され、その成果が蓄積されつつある。その関心対象ならびに学問領域は幅広く、まさに石炭産業の「総合産業としての特性」と合致する。本フォーラムでは、台湾、日本、韓国の若手研究者に研究関心・方法を披歴してもらい、「石炭産業から何を学ぶか」をテーマに、これからの学術研究の可能性と、産業遺産の社会的意義を検討する。具体的には「炭鉱の労働・暮らし・地域」に関する 7 報告、「鉱山の記録と記憶の保存・活用・教育」に関する 6 報告からなるプログラムを編成した。

本フォーラム開催までの背景を概説しておきたい。日本と台湾は、すでに 10 余年にわたって石炭産業史に関する研究・交流関係を展開しているが、始まりは 2011 年の田川市石炭・歴史博物館（福岡県）と台湾の新平溪煤礦博物園區との交流であった。両館は、その後 2017 年に、共通する石炭産業史を背景に、その歴史と文化をともに後世へ継承すべく、友好館の協定を締結した（その後、2023 年には釧路市立博物館も加わった）。そして、日本で石炭産業の研究を展開している産炭地研究会は、田川市石炭・歴史博物館の紹介で 2014 年から台湾との交流ならびに調査研究に着手し、その成果として『台湾炭鉱の職場史—鉱工が語るもう一つの台湾』（嶋崎尚子・中澤秀雄・島西智輝・清水拓・張龍龍・笠原良太著、青弓社、2024 年、A5 判 224 頁 並製、定価 3000 円＋税 ISBN978-4-7872-3544-2）を刊行したところである。

われわれ産炭地研究会が調査研究を開始した時点では、残念ながら台湾では石炭産業自体への社会科学分野での関心は低く、関係者の経験が記録される機会もきわめて少なかった。われわれの調査活動と前後して、ようやく計画的な収集活動が開始され、具体的な学術的関心にもとづく研究成果が蓄積されつつあった。こうした状況を背景に、嶋崎尚子（早稲田大学）と王新衡（国立雲林科技大学）とで、本フォーラム第 2 部を企画したのである。幸いなことに 13 本の報告はいずれも明確なテーマ・関心にもとづく示唆に富む研究であった。本フォーラムをとおして、われわれコーディネーターは、若手研究者を中心に、石炭産業に関する学際的な国

際共同研究が一層進展することを確信した。

なお、本フォーラムは全国石炭産業関連博物館等研修交流会（会長：石川孝織 釧路市立博物館）の研修事業「全炭博研 in 台湾」の一環として実施された。フォーラム開催にあたってご尽力いただいた新平溪煤礦博物園區館長 龔俊逸氏をはじめとする関係各位に心からの感謝を申し上げる。

◆開催日時：2024 年 1 月 21 日 15:00～18:00 ※台湾時間

◆開催場所：新平溪煤礦博物園區

◆主催：全国石炭産業関連博物館等研修交流会、新平溪煤礦博物園區

◆共催：国立雲林科技大学、産炭地研究会、早稲田大学総合人文科学研究センター

◆後援・協力：猴硐礦工文史館、平溪区公所

◆逐語通訳：中国語・日本語 豊田暁非氏、篠原信行氏、小山可奈子氏

◆プログラム フォーラム全体のプログラムは以下のとおり

【フォーラム 1 部】基調講演：台日における炭鉱文化の国際交流

1. 「新平溪煤礦博物園區の活動について」龔俊逸（新平溪煤礦博物園區）
2. 「新平溪煤礦博物園區と釧路・田川との友好館について」石川孝織（釧路市立博物館）・福本寛（田川市石炭・歴史博物館）

【フォーラム 2 部】石炭産業から何を学ぶか—学術研究の可能性と産業遺産の社会的意義を考える

パネルⅠ. 「炭鉱の労働・暮らし・地域」

1. 「坑内労働経験を記録する」清水拓（早稲田大学）
2. 「台湾・炭坑伝染病「sau」の症状、歴史的起源と伝染ルート」徐聖凱（中央研究院）
3. 「炭坑労働者の空間認識」川松あかり（九州産業大学）
4. 「戦後日本の石炭鉱業における労働者の移動」鈴木崇広（早稲田大学）
5. 「三池炭鉱関連社宅の世話方制度（管理制度）」香曾我部藍（早稲田大学）
6. 「石炭産業の盛衰と子どものライフコース」笠原良太（実践女子大学）
7. 「韓国炭鉱（閉鉱）地域の現状と課題」崔允瑞（韓国中央大学）

パネルⅡ. 「鉱山の記録と記憶の保存・活用・教育」

1. 「経験者とともに炭坑の記憶を保存する—猴硐礦工文化史館を例に—」李依倪（文化保温瓶工作室 創辦人）
2. 「建築学の観点からみた炭鉱住宅地研究における産業遺産利用」足立壮太（東京理科大学）
3. 「炭坑文化の翻訳を博物館の教材へ応用する—猴硐礦工文化史館を例に—」張家詩（元智大学）
4. 「《踏血尋煤》：炭坑テーブルゲームの設計と教育実践」蘇渝筠（國立台湾科技大学）
5. 「石炭産業文化資産の教育推進に関する課程の設計と分析—新北市平溪区十分国小を例に—」林筱蓉（国立雲林科技大学）
6. 「炭鉱と美術 無形の心象風景が立ち現れる時」國盛麻衣佳（福岡女学院大学）

当日の様子

① 会場



② フォーラムを記念したランタン

